駿台史学　第178号　99-125頁，2023年3月
SUNDAI SHIGAKU（Sundai Historical Review）
No. 178, March 2023. pp. 99-125.

【史料紹介】

18世紀モスクワにおけるペストの流行と暴動に関する史料

豊　川　浩　一

はじめに

2023年に入り3年あまり続く新型コロナウィルスの猛威に世界はいまだに苦しんでいる。このような感染症は古代から幾度も起こり，そのたびに世界はその流行に晒されてきた。とくに14世紀中葉に大流行した「黒死病」として知られるペストの蔓延は，ヨーロッパの人口の3分の1ないしは4分の1に相当する人が死んだだけではなく，その後の世界に与えた衝撃は大きかった。中央アジアが発原地とされ，東西貿易の発展に伴って黒海から地中海に広がり，イタリアを経由してヨーロッパ全域に蔓延した。また中国やアラブ・イスラーム世界にも広まった。その衝撃は計り知れないものがある。当時の人々にとっては原因も分からず，被害も甚大であったことから，この疫病の猖獗に超自然的な力を信じる人々は神の懲罰や警告を読み取ろうとした。さらにはスケープゴート探しに走り，ユダヤ人に対する迫害が強まった。人々の間には死の偏在を説き，救済を求めることを勧める言説が溢れた。『死の舞踏』のように，この世の虚しさを描く図像も流行した。つまるところ，この感染症はいわば「中世の崩壊」を迎える要因の一つとなったと考えられる(1)。

近代になってもコレラなどの感染症に世界は怯えることになった。多くの伝染病は20世紀の末までに終止符を打ったものの，いまだに根絶できないものや，さらには新型コロナウィルスのように，新たな感染症が発生した。1770年代初頭のロシアにおけるペスト流行はヨーロッパに広がったものがロシアに伝わったという経緯がある。モスクワでのペストの蔓延とそのとき発生した暴動は，ロシアの国家と社会に大きな衝撃を与えた。この時代の前後から，地方では，農民は領主の苛斂誅求に抵抗し，工場民は労働の過酷さに立ち上がり，カザークは政府によるその社会の分断に反抗し，そして非ロシア人は政府の植民政策に蜂起でもって応えた。そしてペテルブルクと並ぶ両首都の一つモスクワで発生した出来事である。当時のモスクワで流行したペストに対する中央政府とモスクワ当局による政策，市民の反応，そしてその結果生じた暴動はどのようなものであったのだろうか。

本テーマに関する研究に関しては，帝政時代以来の蓄積がある。なかでも，モスクワ大学学長にして歴史家 C.M. ソロヴィヨーフ（C.M. Соловьев 1820 ～ 79 年，モスクワ大学学長 1871 ～ 77 年）は，古文書館長としての自身の経験を生かして詳細な研究を著した。モスクワでペストが流行する様子，またそれに関連して暴動が発生する事情について，行政当局の史料を駆使して叙述している[(2)]。A.Г. ブリークネルの研究は，当時の衛生問題を中心にペストの蔓延状況を論じることになる。イタリアと比較して病院の数が少ないこと，医者たちの間でもペストかどうかについて意見が分かれたこと，検疫所については，検診にあたり，病人および健康な人に対して役人や医者たちが慈悲をもって扱うことが少ないために，モスクワの住民はペストよりも検疫所を恐れたことなどの記述がある。エカチェリーナ二世（在位 1762 ～ 96 年）によって 1768 年 11 月に創設された国務諮問会議における女帝の命令，外国の大使による本国宛報告などの史料も含まれている[(3)]。

ソ連時代に入ると，П. アレフィレーンコがアルヒーフ史料を基にソロヴィヨーフを批判的に検討した。彼はモスクワでのペスト暴動をロシア最大の民衆蜂起であるプガチョーフ叛乱の前夜における社会を特徴付けるものとして捉え，この暴動の性格について詳細な検討を加えている[(4)]。ソ連崩壊後の近年，A.M. チェボタリョーフが『ロシア帝国法大全』と国務諮問会議議事録を利用して，当局の動向を見ながら，政府による宣伝戦略を描こうとした。しかし，先行研究についての言及もアルヒーフ史料の利用もみられない[(5)]。またアメリカの J.T. アレクサンダーはロシア史上のペスト蔓延と暴動について多様な史料を利用して記述しながら，18 世紀ロシアの社会史・医学史上に本テーマを位置づける大胆な試みを展開している[(6)]。なお，最近の研究でもこのテーマを論じ[(7)]，また 18 世紀ロシアの歴史を論ずるときには必ずと言ってよいほどこの事件について触れているのである[(8)]。

ここで紹介する史料について述べておこう。ソロヴィヨーフの当該研究全編がアルヒーフ史料からの引用で構成されており，そのため基本的な事項を史料として紹介する。また，プレオブラジェーンスキー近衛連隊将校アレクサンドル・サブルコーフ（A.A. Саблуков）がペテルブルクからモスクワの実質的指導者であるピョートル・エロープキン（П.Д. Еропкин 1724 ～ 1805 年，元老院議員，陸軍中将）のもとに派遣され，自分の父親への手紙で事件について貴重な情報を伝えている。彼は 1771 年 8 月 14 日にモスクワ第 11 管区監督官としてモスクワに入り，1772 年 12 月の執行委員会終了まで同市に滞在することになった。モスクワ市の防備と暴徒からのクレムリン防衛というその困難な仕事のために，彼はエロープキンから高く評価され，かつエカチェリーナにも報告されて大尉に昇進した[(9)]。この史料は軍人から見たペストが蔓延しているなかでの日常を描いたものとして，当時の長司祭ピョートル・アレクセーエフによる記述が高位聖職者からの視点による叙述とは異なっている[(10)]。貴族で博物学者・農学者として有名であった A.T. ボロートフ（A.T. Болотов 1738 ～ 1833 年）はペスト発生時には自分

の領地トゥレイノに滞在していた。しかし，感染症を恐れながら，モスクワでどのようなことが起きたのか，また自身がいる村はどのような状況なのかを詳細に伝えている。困難な時の人々の精神状況が手に取るようにわかる興味深い史料となっている[11]。それらは，いずれもペスト流行という「非日常」的な状況の中で生きる人々の生活という「日常」のあり方を示している。

なお，本来であれば，より詳細な史料研究を古文書館でも行うべきであろうが，現在まで続く感染症の状況，さらには 2022 年 2 月 24 日に始まった「ウクライナ戦争」のためにロシアでの調査は不可能となった。そのため，本論では，刊行史料の紹介に止めざるを得ない。こうした限界があるものの，できる限りモスクワのペスト蔓延の状況，市民の様子，暴動，その後について再構成するための史料を提示しようとするのが目的である。

第 1 章　ペスト蔓延という「非日常」のなかの「日常」

第 1 節　モスクワでのペスト発生

ロシア国内へのペストの伝播

1771 年 9 月 15 ～ 17 日にモスクワで民衆暴動が発生した。これは 1770 年にロシアに伝染したペストとモスクワ市当局の無作為に主な原因があった。蜂起は厳しく鎮圧された。しかし，この後，当局は状況改善に取り組み，モスクワではペスト発生は二度と起こらなかった。

ロシア国内でのペスト発生と感染，その後の暴動は 1768 ～ 74 年の対オスマン戦争と関係がある。1769 年，ドナウ諸公国（the Danubian Principalities, モルダヴィア公国とワラキア公国）でオスマン帝国と戦っていたロシア軍中でペストが発生した。翌年夏の終わりには，ペストはポーランドを経由してマロロシア（ウクライナ地方）に広がり，次いでロシアの諸都市，南から北へ向かう大きな街道沿いにも現れ始めた。ロシア政府はモスクワ県を南から関所で囲み，検疫の手段を講じた。モスクワ市そのものをも封鎖することが命じられた[12]。

戦闘での負傷者をロシアに運んでくる際に感染が広がったのである。ピョートル一世（在位 1682 ～ 1725 年）時代に創設された野戦病院のあるモスクワのレフォルトヴォに負傷者が運ばれた。1770 年 11 月，前線から運ばれた将校が死亡した。治療にあたった医師が感染し，その後，病院近くに住んでいた 20 人以上が感染した。感染の第二の中心はザモスクワレーチ（モスクワ川の外側）にある「ラシャ宮殿」（大規模織物工場）である。そこにペストに汚染された「戦利品の毛織物」が持ち込まれた可能性が高い。

当局者の無策と都市住民の「逃亡」

モスクワ総司令官（Главнокомандующий в Москве）ピョートル・サルティコーフ元帥（П.С. Салтыков 1698 ～ 1772 年，モスクワ総司令官 1763 ～ 71 年）は効果的な検疫対策をとらなかっ

た。もっとも，オスマンとの戦いの場となる地域にある野戦病院には経験のある医者はいたものの，ロシア国内にペスト患者を治療したことのある医者も，またどのような病気なのかを明確に認識している医者さえもいなかった。さらに，ペストとチフスの区別がつきにくいことも診断を遅らせる原因となった。その結果，1771 年 8 月までに，「疫病（ペスト）」はモスクワの全域と郊外にまで及んだ。都市当局は住民がパニックに陥らないように感染症の発生とその状況を秘密にしようとした。9 月までに，死者があまりにも多く，棺や墓が足りなくなった。死者数が 900 人を上回る日もあった。死体処理も間に合わなかった。そのため死体が路上に山のように積まれることになる[13]。

驚くことに，モスクワ市の役人，領主および商人（パン屋や酒保商人なども含めて）は都市を捨てて逃げ出した。感染に怯えたサルティコーフ本人も，エカチェリーナ二世に都市を離れる許可を得るべく請願書を出したものの，その返事を待たずにモスクワを離れて自分の領地マルフィノに引き籠ってしまった。モスクワ脱出組の中にはモスクワ県知事イヴァン・ユシコーフ（И. Юшков）もいた。こうして都市行政の機能は完全に失われたのである。市内では殺人やその他の犯罪が横行した。近郊の村の農民たちはモスクワのカタストロフィー的状況を恐れて，この都市に食糧を供給しなくなった。そのためモスクワでは飢餓が始まったのである。

検疫体制とその実態

サルティコーフは，検疫所は不要であると繰り返していた。役人や医者たちは，検診にあたって，病人だけでなく健康な人に対してでも彼らをぞんざいに扱ったため，モスクワの住民はペストよりも検疫所に恐怖心を抱くようになった。実は，17 世紀のロシアには検疫所についての理解はなく，ロシアに恒常的な検疫所が設置されるのは 1738 年より早いことはない。当時も対オスマン帝国との戦争でペストが発生した。そのためハリキウ（ハリコフ）に検疫所が設置されたが，それは 1 年後に閉鎖されている。その後，1755 年からはポーランド国境に 10 か所に満たないほどの検疫所が設置された。当時モスクワにいた最年少の医師シャルル・ド・メルテンス（Charles de Mertens 1758 年ストラスブール大学で学位取得）は病気に対する人々の無思慮を嘆いている。世間は政府と医者の審議に注意を向けなかった。ペストで死んだ死体を運んだり埋めたりする仕事を担う懲役囚を含めたいわゆる「ペスト係」ないしは「荷車運搬人」と呼ばれる人々が，感染に注意を払わず，手で触わることを恐れないことが指摘されている[14]。

エカチェリーナ二世は最初からモスクワの元老院議員とサルティコーフの行動に不満を持っていた。とくにサルティコーフについて，女帝および国務諮問会議のメンバーたちは，この感染症に対する彼の認識不足や同僚との非協力姿勢，さらにはその能力に懸念を抱いていた。実際，72 歳のサルティコーフはペテルブルクから送られてくる命令に従わずに反対していたの

である。こうした理由から，エカチェリーナはエロープキンにこの事態の収束を任せることになる。

しかし，モスクワ当局は十分な行政も行わないまま成り行きを傍観し，モスクワ住民を警察の管理に任せてしまった。貴族で博物学者・農学者としても著名であったアンドレーイ・ボロートフ（A.T. Болотов 1738 ～ 1833 年）は，モスクワ市当局が行うのは「ただただ家からペストに感染してその伝染病で死んだ人をひっかき棒にひっかけて外へ出し，彼らをこの都市の外に運び出して穴に埋めることだけなのだ」[15]，と嘆いている。とはいえこうした仕事を実際に行ったのは警察署に拘留されていた囚人たちであった。彼らは発病人が出た家を壊し，疫病で死んだ人を引きずって穴に入れ，さらには罹病した人たちを区別なく検疫所に引きずっていった。ペスト，飢餓，失業，官僚主義，そして警察の専横，以上がモスクワ市民の運命を決定付けた。

イギリス大使キャスカート卿（Lord Cathcart）は本国の北欧担当国務大臣（Secretary of State for the Northern Department）サフォーク伯（the Earl of Suffolk）のスヴォリクにモスクワの絶望的な状況について次のように報告している。「警察のとる予防的措置は効き目がない措置よりもひどいものです。たとえば，病人がでると，その家のドアのところには，彼らが死ぬのを待って彼らの住居にあるものすべてを燃やすようにという命令を持った兵隊などが立っています。こうした人々は売れるものは何でも彼ら自身のために持ち出すことをいつも考えている始末なのです。しかも，感染した衣服をさまざまな家に売り払うことで，この都市すべての箇所にペストをまき散らすのです」[16]。

事態は深刻さを増していくのである。こうしたペストの流行という「非日常」の中にも人々の生活である「日常」があった。この点を見て行くことにしよう。

第 2 節　当局者による記録―ソロヴィヨーフの叙述から

モスクワにおけるペスト蔓延の状況

C.M. ソロヴィヨーフは，古文書を利用して，モスクワ市当局がどのようにペストを見ていたか，暴動勃発の経緯とその様子，以上について詳細に記述している。

1763 年から，モスクワでは元老院の第 6 部と第 7 部が疫病発生時にいかにモスクワの衛生，治安，その他を維持するかということについて検討することになっていた。都市の状況，家々の状態，人々の様子，風紀，習慣，以上がそれを行うのを阻止していることが分かり，その改善を提案した。エカチェリーナ二世はこの提案に反対して，1769 年 9 月 9 日にモスクワの元老院に回答した。しかし，モスクワ総司令官ピョートル・サルティコーフ元帥は〔モスクワの〕元老院の意見に賛同した。病院の筆頭医シャフォンスキー（главный доктор госпиталя Шафонский）は危険な病気について医療上の規制の重要性を知っていたので，市警察長官バフメーチエフにこのことを知らせ，サルトゥィコーフにも報告した。1770 年 12 月 22 日にサ

ルティコーフはエカチェリーナ二世にそのことを書き送っている。同日，医師たちの会議が開催された。その一人メルテンスはサルトゥィコーフに病院を閉鎖するように提言し，それが実行されるのである[17]。

1771 年に入ると，病気が鎮静化するという情報が流れ始めた。1 月 4 日にサルトィコーフは書く。「いまや, 病気は落ち着いています。寒い時期はそのことを少なからず促進させています。ヴヴェジェンスキー丘では数日間病気について聞いていません。危険な場所から来る人はどこでも近衛隊将校がしっかり見張るよう命じられているのです。（中略）ここモスクワ近郊は警察署が関所となっています。しかし，いまは冬なので，すべての堀は雪が吹き込んで埋まっているためにどこでも通行可能です。（後略）」。1 月 15 日の彼の報告である。「ヴヴェジェンスキー丘にある病院（すなわち小病院）で疫病が現れ，そこではすべての人が死にました。病気について率直に報告することはできません。そこにはかつて病院がありましたが，いまはありません。さしあたり二人の代診を除いて，いまやそこでは〔住むことが―以下，鍵括弧は筆者の注〕禁じられています。誰もそこにはいませんでした。病院の筆頭医師は検査することを，一人の医師も行かずに，顔を合わせずに検査するように医療上の規制を求めているのです。（後略）」[18]。

寒気が病気の蔓延を防いでいる様子が分かる。しかし, 2 月に雪解けが始まった。暖気によって，疫病が戻ってくるかもしれないという危惧が生じる。2 月 7 日，サルトゥィコーフは女帝に病人を病院から修道院へ移すという提案をする。「春が近づいております。医師を派遣したのちに, すべての病人たちをモスクワから 15 ヴェルスタ〔1 ヴェルスタは 1･067 キロメートル〕から 50 ヴェルスタまでの距離にある各修道院に，それぞれ少人数ずつ移すようにお命じくださらないでしょうか。修道院には何ら負担にはなりません。というのも，病人の数は少数ですし，そこには新鮮な空気があるからです。一方，モスクワは病院がなく不潔です。病院ははなはだ不便な場所，ヤーウザ川の上流にあります。そこから汚物が都市に流れてきます。都市からの浮浪者を春にかけて減らすのも悪いことではありません。人の住んでいる町は小さくて狭い建物が立っているのです」。しかし，女帝は病人を移すことに同意しなかった[19]。

サルティコーフの 3 月 13 日の報告がある。「この 3 月 10 日，私は，〔医師〕ヤゲルスキーからモスクワ川ほとりのカーメンヌィ橋近くにある大規模織物工場である「ラシャ宮殿」（суконный двор）で現れた伝染病について報告を受けました。1 月から死者は 123 人にのぼり，病人は 21 人です」。サルティコーフはそこに 5 名の医者を派遣した。彼らは，診断の結果，病気は腐敗しやすい伝染性の，そして感染しやすいもので，非常にペストに近いと結論付けた。そこでサルティコーフはすべての元老院議員を集めて次のように述べた。第 1 に，女帝陛下の命令に従い，病人を修道院ごとに振り分けるが，不足した場合にはすべての病人を「ラシャ宮殿」からウグレシスキー修道院に移すことも必要だろう。そのことについてはアムヴローシー

大主教の賛同を得ている。第 2 に，すべての健康な人について，医者が彼らを診察し，メシチャンスカヤ通りの向こう側の原にある「雇用会館」（наёмный дом）に移して，これを封鎖すること。第 3 に，放棄した「ラシャ宮殿」を封鎖すること。しかし，それよりも前に，「ラシャ宮殿」から約 2000 人の工員（фабричные）が逃亡して，あらゆる都市に住み始めている。その結果，すでに通りという通りには死体が積み上げられていた[20]。

検疫所不要を唱えるサルティコーフ

検疫所について，サルティコーフは不要であると繰り返す。4 月 2 日，彼は書いている。「すべての出入りする人のために検疫所を設置する必要性はありません。不便さの方が上回っています。モスクワに入ってくる人を禁止することははなはだ危険です。ほとんどすべての都市は購入したパンを食べています。もしそれらが都市に搬入されなくなると飢餓が生じます。すべての仕事は稼働しなくなります。7 ヴェルスタを超えては誰も買いに行かなくなります。そうすると略奪が起こるでしょう。そのような盗みが起きなければ十分です。モスクワには禁止する手段がありません。この都市にはそれがないのです。清廉さは破壊されました。軍隊はありません。誰が包囲するというのでしょうか」[21]。

エカチェリーナ二世が陸軍中将で元老院議員のエロープキンにあらゆる予防措置を講ずることを委託する。サルティコーフは，下の 4 月 21 日付手紙に見られるように，このことを侮辱と感じる。「陛下のご命令に従い，命令すべてを陸軍中将で元老院議員のエロープキンに託しました。予防措置すべてがまずとられること，それ以上は何もしないこと，彼にはただそうしたきまりを順守することになり，そのため私からすべてを彼の監督に任せることになりました」。しかし，エロープキン任命の後でも，モスクワの状況についての報告はサルティコーフに送られている。4 月 7 日，彼は書く。ウグレシスキー修道院とシーモノフ修道院を除いて，死亡したり病気になったりした人はいない，と。また，4 月 18 日に報告する。モスクワから工員たち 943 名（両性）をシーモノフ修道院，ダニール修道院，ポクロフスキー修道院に移した。5 月 30 日，サルティコーフは自らを慰めるかのような報せを送る。検疫の修道院では，死んでいる人も，また新たに病気に罹った人もいない。ただウグレシスキー修道院では 9 名が病気である[22]，と。

しかし，6 月 20 日から，シーモノフ修道院では再び疫病が現れ，10 人の工員が死去し，6 名が病気に罹った。この時から，病気はますます勢いを増し始めた。エロープキンの措置はこの災厄を軽減せずに増大させた。8 月 30 日，サルティコーフは次のように書いている。「いまでは検疫所を作ることが不要なのは明白です。すでに遅いのです。すなわち，モスクワからほとんどすべての人が出て行ってしまいました。あらゆる卑劣な行為が行われています。酒保商人やパン屋はほとんど残っていません。みな検疫を恐れています。貯蔵店はありません。この

町には誰もいないのです。危険のない飢餓はありません。冬がやって来ます。屋敷を引きずって持っていくわけにはいかないのです。人々は意気消沈してびくびくしていました。検疫は同地のすべての人々に重くのしかかっています。幾人かは〔検疫所のある〕関所に脅しをかけていました」[23]。

サルティコーフの9月14日付の絶望的な報告がある。ここでも彼がエロープキンに対して抱く嫉妬心を読み取ることができる。「病気はもうすでに膨れ上がり，日に日に勢いを増しています。そのため誰もそれを押しとどめることができないのです。自分の身を守ることで精一杯です。モスクワでの死者は一日で835人です。そのなかには密かに葬られた人は含まれていません。みな検疫の恐怖にかられています。通りには死体が60体かそれ以上放置されています。モスクワから多くの卑賤な民衆が逃げ出しています。とくにパン屋，白パン職人，酒保商人，クワス醸造者，そしてあらゆる人々がです。彼らは食料品を取引している人々です。そして他の職人たちまでもがそうなのです。また食料品を購入するために必要な仕事の口もなく，パン屋もないありさまです。貴族という貴族はみな自分の領地のある村に行ってしまいました。陸軍中将ピョートル・ドミートリエヴィチ・エロープキンはこの災厄を止めるべく注意深く勤めています。しかし，彼の努力は無駄でした。彼の家にいる家内奴僕は感染しました。そのため，女帝陛下に報告して，この委員会から慈悲深い解職を請願する旨，彼は私〔サルティコーフ〕に願い出ました。私の官房でも感染者が複数出ました。これ以外に，私の周りのすべての家で死者が出ています。この不幸におびえながら，私は全ての門を閉めて一人で座っています。私はあらゆる方法で陸軍中将エロープキンを助けました。しかし助力は無駄でした。全軍隊を分散宿営させました。勤務地では，すべての仕事が滞っており，どこでも役所の役人たちが感染しています。私はこの災厄の時期の期間，来るべき寒い時期が訪れ，この災厄が鎮めるまで，一時期離れる許可をあえて願い出ることにしました。そして陸軍中将エロープキンの委員会は現在では不要でありますし，害悪以上のことをなしています。なぜなら全員私的な監督官だからです。自ら派遣し，自ら出かけ，ますます病気をまき散らしているのです。現在，工場主たちは自分の検疫所を作り，自分のもとにいる人々を検査に使っています。そう人たちも自分のところの病人を養うことに同意しています。ラスコーリニキ〔古儀式派教徒〕たちもまた仮小屋に仲間の病人を連れてきているのです」[24]。

エカチェリーナ二世のサルティコーフへの不満

当初から，女帝はモスクワの元老院議員とサルティコーフに不満だった。彼らはペテルブルクから送られてくる命令を支持せず，それに反対していたのである。後に，エカチェリーナはそのような状況をヴォルコーンスキー公に書いている。「病気はこの都市に紛れ込みました。ほかの何ものからでもなく，都市の安全が任されていた人々の見過ごしからです。近衛隊少佐

シポフとその部隊について述べましょう。彼は，すべての国境警備隊と検疫所，かなりの数の近衛隊の将校たちとその部隊ともども，去年，元帥サルティコーフ侯に派遣されました。それは，セルプホーフから始まって，首都〔ここではペテルブルクと並ぶ両首都の一つモスクワを指す〕にとって幾分危険性があったすべての街道沿いの任務が任されたのです。これを除き，人々には，キーエフ，ネジニ，およびウクライナのいくつかの小さな村以外に行くことが禁じられました。そこでは病気がすでに幾分か食い止められていました。1770 年 12 月，病気がモスクワ中の病院で働く人々の間で明らかになり始めたとき，病気の評判は耳にしていませんでした。余は，元帥サルティコーフ侯に，最初からこの災厄の早期の根絶のために考え得る出来る限りの手段すべてを講ずるように命じました。しかし，病院や彼の部下たちにおいては，この災厄が早くに根絶されたかのように，ここから命令されたことからモスクワについて何も適切に判断されておらず，またあまり正しく考えられていませんでした。かくしてもっぱら成功することを願い，至高なる神のお慈悲にすがって，きわめて合理的な考えをもって行うべきであります。しかし，余の罪ゆえに，しばしばそれに値しないのですが，春まで生きながらえました。そのとき，病気はセルプホーフから毛織物を搬入する際に大ラシャ工場〔「ラシャ宮殿」〕に現れ始めました。この報せは，今年の 3 月に，余の耳にも届いたのです。余から以前の警備隊に命令が送られました。病気と検疫所に関することすべてを，余はそのときわが陸軍中将エロープキンに任せたのです。彼が〔その成果を〕後世に示すだろうと考えてのことです。彼は勤勉かつ倦むことなく任された課題に取組みました。しかし，正確に実行したのは一つだけでした。当時，他のすべての問題については，昔から上司からの過度の寛大さが定着していました。また，従っている者からは不服従と身勝手がありました。今回はこうしたことが次のような結果を招きました。自分の主人たちからの世話もなく放って置かれた無分別な庶民は，もっぱら疫病という名前に怯え，自分の村に逃げ帰るのです。彼らの安全と救いとなることすべてが極度の嫌悪の対象となっています」(25)。

エカチェリーナの不満は，ニキータ・パーニン伯（Н.И. Панин 1718 ～ 83 年，62 ～ 83 年には外交責任者で皇太子パーヴェルの扶育官を務め，女帝の専制権力に制限を加えようとした）への手紙からも明らかである。「私はモスクワの状況を非常に心配しています。なぜなら，そこでは，病気と火事を除いて，愚かさが多いからです。すべてこのことは，余のご先祖の顎髭〔サルティコーフのことを婉曲に指す〕によって引き起こされています」(26)。

サルティコーフは検疫所設置に反対することで，エカチェリーナにはすべての新しいことは無益で無用なことだと考える老人として映った。住民はエロープキンを受け容れた。サルティコーフは，自分が正しいことを示すことができないさらなる行動に出た。すなわち，彼が休暇について願い出た 9 月 14 日，エカチェリーナの許可を得るよりも以前に，本人はモスクワ郊外に 2 日間出かけてしまったのである。もちろん，この行動もそうした昔風のこととして説明

され得るであろう。サルティコーフは,「私一人が何をすることができるのでしょうか，私が何を助けることができるのでしょうか」，とまで述べるのである。一人エロープキンはすべての問題を処理している。彼はモスクワに留まっているのである。もちろん，サルティコーフの2日間の休暇については意見をさしはさむことではないかもしれない。もし彼が出発した次の日，9月15日に暴動が起こらなければであったが[27]。

大主教アムヴローシーの言動と暴動に向かう気運

モスクワで発生したこの暴動は，恐ろしく醜悪な未曽有の現象を引き起こした。大主教アムヴローシーの殺害という事態である。

1767年，モスクワ府主教ティモフェイ（Тимофей）が死去した。この善良で温厚とされた府主教の時代, 管区監督局（констистория）の強い権力と権力乱用, 賄賂授受による誹謗と中傷, そうしたことが許しがたい現象となっていた。ティモフェイの後継者は大主教アムヴローシー（Амвросий）である。彼は前府主教とは正反対の性格の人物であった。精力的で疲れを知らないアムヴローシーはモスクワの無秩序を良く知っていた。以前，彼はクルティーツキーの主教（クルティーツキー修道院はヤーウザ川下流のモスクワ川の左岸にある）であった。その後，モスクワに住み，この無秩序を根絶すべく法規や命令によって規制しようと決心していた。

しかし，それは困難な事業であった。なぜなら，無秩序の根源には，結婚することを義務として世俗と交わる司祭であるいわゆる白僧たちのはなはだしい貧困があったからである。青年期初期における義務的な結婚が，不自由のない生活の維持を保証する大家族を形成することを前提としているが，その課題の解決は甚だ困難であった。人間の価値を毀損して生活の糧を求めること，いわば無分別に不公平・不公正を非難する渇望に駆られること，それに対しては文献の上では厳しく嘲笑されているが, 実際には以上のことが行われるのである。アムヴローシーは管区監督局に秩序をもたらした。秩序の違反に対しては,「鎖によって，すなわち鉄への拘束による…懲罰」が念頭に浮かんだという。しかし誰が新しい秩序に従うことを望むであろうか。人びとは即座にそれを退けてしまった。アムヴローシーは聖職身分にある青年が, 神学コースを終了せずに，また主教のもとでの試験に合格せずに結婚することを禁じた。聖職にある者が世俗〔の者〕に変わること，また教会から教会へ移ることを禁じた。聖職者が自分の家を購入するために金を使わずに教会の家を持つことができるように，宗務院にピョートル大帝の命令の復活を願い出た。アムヴローシーは，モスクワでのいわゆる「道路の交差する地点〔ルーシすなわち古い時代のロシアでは十字路を крестец と呼び，そこで商売が行われていた〕の司祭」についての記憶があった。「モスクワでは，あまりに多くの怠惰な聖職者やその他の聖職者がぶらついている。彼らは甚だしい罪の誘惑にかられ, 教会奉仕へ雇ってもらうためにスパッスキーの十字路に立って酷い醜態をさらしている。お互いに商売している。聖職者への恭敬の

代わりに，互いに値段をさし引いたりしている。大いに反目しながら口汚く罵っている。ときには喧嘩もしている。祈禱の後には，自分の家も，また落ち着き場所もなく，残った時間を国営の居酒屋や旅籠で過ごす。あるいは酔っぱらうまで飲み，醜態をさらして道という道をぶらつく」。長老たちは述べる。こうした十字路に立つ司祭たちには次のような習慣がある。彼らは手に白パンを持って立ち，雇い主がミサに対して対価を十分に出さないときには，彼に叫ぶのである。「この時間をちょっとしか食べないような，そんな商売はしない」（白パン，それによって祈禱を行う能力・資格を失うのだ―ソロヴィヨーフの注）[28]，と。

奇跡成就のイコン

次のことを考えるのは容易なことである。アムヴローシーのような大主教は，下層民の抱く気分や気持ちを感じ取ることができない。彼は次のこと知っていたに違いない。かつての府主教は感情を傷つけられた人々に対して同情を抱き，民衆も尊敬を持って彼を迎え入れた。しかし，自分は好かれていないことを。また好感を抱かないことは自然と好感を持たれない状況を引き起こすことを。こうした点からアムヴローシーに次のような報告が届いている。キタイ＝ゴロドの東の端にあるワルワーラ門の広場には異様な情景が広がっている。それに対して，法規が貫徹し，啓蒙が支配的となるべきだと。ワルワーラ門の壁には随分前からボゴリューブスカヤ・ボゴローディツァのイコン（Боголюбская икона Богородицы「敬神生神女のイコン」。病気治癒を祈願してウラジーミルの住民がこのイコンのとりなしをお願いするためにスーズダリのボゴリューブスキー修道院からこれを持ってきたところ，病気が癒えたとの言い伝えがある）が掛けられていた。このイコンが「疫病」（моровая язва）を治癒するのに役立つという噂が広まった。そして 9 月初めからイコンを前に休みなく祈りが夜中じゅう行われていたのである。とある工員が述べた。夢で生神女を見た。イコンは彼に語った。「すでに 30 年, ボゴリューブスカヤ・ボゴローディツァのイコンには誰も祈りを捧げなかっただけではなく，灯明も上げなかった。だから，これに対してキリストはモスクワに石の雨を降らせた。しかし，生神女は石の雨を 3 か月の疫病に取り替えるように懇願した」, と。ここで, 主教の甥バンティシュ＝カーメンスキーの言葉を引用しよう。彼の話しには明らかに, 無秩序と権力乱用との闘いの時期に,〔聖職者には〕どれほど鬱積するものがあったことか。すなわち,「怠惰，貪欲，そして呪うべき迷信が作りごとに駆け寄ってきた。9 月初め，全聖人のもとで，司祭は，クーリシキのなかで何か工員の助力を得て奇跡を考え付いた（先の工員の見た夢についての話しが続く）。忌まわしい雄ヤギたちが（司祭たちによって彼らの罪がそう呼ばれる！），自らの信徒たちと教会の供物を放置して，祈禱ではなく，取引を行って，読経台をもって集まった」のであると。バンティシュ＝カーメンスキーは，ワルワーラ門での事件に関する大主教へ情報が伝えられたときの第一印象を記述している。すなわち，迷信，偽りを抱いて見ること，すべてこのことは法

規や命令で禁じられている。禁止は必要なことである。「彼（アムヴローシー）はその本分を敬っていた。法規や君主の命令によって（後略）」[29]，というのである。

聖職者の不服従が教会の調査や管理を行うことができなくなったとき，アムヴローシーは問題を別の方向から眺めていた。すなわち衛生の観点からである。バンティシュ＝カーメンスキーは続けて言う。「疫病は都市で勢いを増した。一日で 900 人以上が死んだ。医師の指示書によると，人々の間の接触やぎっしりと詰まった人々の集まりは禁じられた。主教は，ワルワーラ門での民衆の集まりを禁止するための手段についてエロープキン氏と相談することができなかった。エロープキン氏だけがこの都市の長だったのだ。庶民の注意が自分に向かないようにという恐れがこの問題について次のような解決を行わせた。しばらくはイコンをそのままにしておくこと。ワルワーラ門に集まっている喜捨を人々が盗まないように，管区監督局のお布施箱に封印をすること。このことを安全に実行するために，エロープキン氏は幾人かの兵士を派遣した」。エロープキンの証言によると，アムヴローシーは 9 月 14 日までに彼のところに来て語っていた。ボゴリューブスカヤ・ボゴローディツァのイコンのもとにある喜捨は次のように慎重に考えて封印するつもりであること。つまり，イコンの出現は祈りに対して大きな利益を得ることができるとした聖職者たちのフィクションによって考えだされたものである。このことが，後のような，喜捨に関する不幸な処理であり，暴動の原因であった[30]。

暴動の始まりと展開

モスクワ市警察長官バフメーチエフの申し出に基づいたサルティコーフ元帥の報告によると，9 月 15 日，木曜日，午後 8 時，都市の警鐘が鳴り，通りの衛兵のところでは鳴子が響いていた。市警察長官は人を派遣して何が起こったのかを調べさせ，ワルワーラ門のところで，多くの数の民衆がざわめき喧嘩をしていると報告を受けた。バフメーチエフは竜騎兵 3 名と軽騎兵 2 名を伴って，彼自身出かけて行くと，イリインスキー門からワルワーラ門まで，人々が壁の両側に 1 万人ほど立っていて，彼らの多くが棍棒で武装しているのを見たのである。なぜ詰めかけたのかと問うと，群衆はこの市警察長官に答えた。警鐘が鳴ったので詰めかけたのだ。その警鐘は，ボゴリューブスカヤ・ボゴローディツァのイコンに対する祈禱者による喜捨として出したお布施を，主教の書記とともに 6 人の兵士がお布施箱から抜き取るためにやって来た，ということを知らせるために鳴ったのだ，と。お布施箱の周りにはモスクワ守備隊の衛兵が立っていた。この衛兵たちは次のように言明している。お布施箱は要塞参謀の許可なしに処理することは許されていない。こうしたことから，まず初めに騒ぎが起き，その後に喧嘩が起きたのである[31]。

イコンを剥いで，このイコンに対するお布施を盗ろうと嫌疑をかけられた人たちはさんざんに殴られた。民衆は最後の臨終のときまで母なるいと浄き生神女のために立っていた。5 人か

ら成る警護を引き連れては何もできずに，バフメーチエフは，ストジェンカ（ソロヴィヨーフ時代のコメルチェスキー通り）の自宅にいたエロープキンのもとに行った。ヴォスクレンスキー門のところで，彼は1万人ほどの群衆に遭遇した。顎髭を生やし青い緩く長い上着を着た一人の男の指導のもと，彼らは棍棒を持ち，オホートニー・リャートからトヴェルスコーイ，モホヴォーイ沿いに走り回っていた。この男は絶えず何かペテン的なことを叫んでいた。「さあみんな，母であるいと浄き生神女のもとに急ごう。神の母を奪われるのを許してはいけない！」(32)，と。

バフメーチエフは群衆を押し止めることができた。彼らのうちの20人かそれ以上の人々が市警察長官の側に立ち，彼に従ったのだ。かくして，彼らの助けを借りて「青い長い上着を着た男」を捕まえ，見張り小屋に押し込めた。モホヴォーイでは，ある家の者たちの手助けで，同じように喧嘩をしていた大声で騒ぐ男を捕まえた。エロープキンのもとに行って，バフメーチエフは彼から次のことを聞いた。「より良い方に向かうようすべてを行いなさい。私はあなたに部隊も資金も提供することはできないのだ」，と。バフメーチエフはもと来た道を引き返した。「青い長い上着を着た男」が入っている見張り小屋に立ち寄った。しかし，彼はおらず，見張り小屋には代わりに「長い上着を着た男」を監視していた人々がさんざんな目にあってそのなかに入っているのを目にしたのである。それより以前に，エロープキンのもとに行きがてら，バフメーチエフは次のようなことを求めて警察隊少佐を群衆のもとに派遣した。すなわち，主教の書記およびイコンへの喜捨を守るために派遣した部隊を警察の衛兵のもとに置くこと。なぜならば，そのような悪人たちは公開で処罰されねばならず，群衆による殴打はめったに行われてはいないからである。さて，この少佐はバフメーチエフのもとにやって来て報告した。群衆は同意しなかったのみならず，彼ら自身は次のことも求めたのである。モスクワ守備隊の衛兵たちだけがワルワーラ門のところに立つこととし，自らの指揮官である要塞参謀の命令なく敢えてそのことをしないと。バフメーチエフはこれについてエロープキンに報告した。すると，彼はできる限り早く要塞参謀を探すか，あるいはユシコーフ県知事を探すように命じた。しかし，このための派遣をしているとき，クレムリンにいた群衆はチュードフ修道院で主教の家を略奪し，その家の主人である主教を殺すために捜しているという噂が流れた(33)。

モスクワ守備隊の衛兵たちと大主教の書記の間で，喜捨のお布施金について，間もなく口論が始まった。このとき，論争に参加した群衆の間には，主教の言動について話しが及んだ。「人々は大声で話した。主教は，一度たりとも，典礼での祈禱によって，神の母へ当然行わなければならない尊敬を払わなかった。〔主教は，〕親切に喜捨する人々の内いく人かは自分の最後の財産から，そのために集めておいたものであったが，その〔集まった総額〕1000ルーブリを得ることができると知ると，何のためらいもなくお布施金を奪うことにしたのである。不信心者である彼は，このイコンの前ではその死に値するのだ！」(34)，というのである。

アムヴローシーは民衆によるこうした言動や威嚇について知っていかもしれない。彼は，変装してチュードフ修道院からドンスコイ修道院へ逃れ，そこからさらに遠くへ，ヴォスクレンスキー修道院へ行こうとした。群衆はチュードフ修道院で彼を探し，凶暴になってすべてを破壊した。チュードフ修道院では，大きなワインの酒蔵が破壊者たちによって掠奪され，宴会が始まった。しかし，翌9月16日，人々はなぜクレムリンのチュードフ修道院にやってきたのかを思い出した。誰かが言った。主教はドンスコイ修道院にいると。300人の群衆はそこに移動した。アムヴローシーは，暴徒たちが近づいてくると聞きつけると，イコノスタシスの後ろから合唱隊の中に隠れた。しかし，この隠れ場所は見つかった。この不幸な人物は教会，修道院から引きずり出された。後ろの門の前で，まさにワルワーラ門のイコンによって殺されたのである。8本の杭の上で2時間かけて殺された。それを目撃した者は次のように語っている。「外観がわからないほど，人物の姿が残っていないほどであった」，と[35]。

エロープキンの対策と行動

この9月16日（金曜日），エロープキンはストジェンカの自宅に部隊を集めた。かろうじて夜までに，近衛部隊にヴェリコレツキー連隊の50人が加わり130人が集まった[36]。この僅かばかりの部隊には2門の大砲があった。午後5時30分，エロープキンは自分の部隊と共にクレムリンに向かった。通りで十字架を持った聖職者を捉まえて，自分と一緒に行くように強要した。ボロヴィツキー門を通ってクレムリンに入る際，部隊は群衆からの棍棒とレンガの出迎えに遭遇した。エロープキンは暴徒を説得するために衛戍司令官グルジンスキーを派遣したが，この人物は石の出迎えを受けることになる。代将マモーノフも同じ目に遭った。彼は，その善良な意思から，チュードフ修道院に自分の部下と共にやってきて，群衆に向かって話し始めた。彼は頭を割られ，顔も粉砕されたのである。説得ができないことを見て，エロープキンは群衆に向かって鉄砲と大砲を放つことを命じた。百人以上の人々がこの砲撃と射撃で倒れた。249人が拘束された。残りは散り散りに逃げた。これはエロープキンの最初で最後の功績だった。彼は二か所棒と石で怪我をして疲れ切った。熱病の発作で寝込まねばならなかったほどである。そのためさらなる処置に臨むことはできなかった[37]。

翌9月17日（土曜日），日の出前，群衆はクレムリンのスパッスキー門に押し入ろうとした。この門のところに県知事のユシコーフが立っていた。人々は前日に軍隊によって捕まえられた仲間たち全員の引き渡しを求めた。また，公衆浴場の封印を解くこと，検疫所を廃止すること，医師たちにその仕事につかせないこと，以上を求めた。前日の16日，エロープキンはサルティコーフに暴動について報告した。17日の朝9時に元帥サルティコーフはモスクワに戻った。彼の命令に従って，前日にはヴェリコルツキー連隊もモスクワに入った。サルティコーフは市警察長官バフメーチエフに連隊の指揮を任せ，暴動を鎮めるために，彼に兵士を赤の広場を目

指して行くようにと命じた。バフメーチエフは連隊を広場に整列させ，取り囲んでいる群衆に向かって言った。「あなたたちに家に戻るように忠告する。逆らう場合には殺されるだろう」。30 秒経つと，広場には誰もいなくなった。これによって暴動は終わったのである[38]。

暴動の後始末

9 月の暴動の原因はすべての人々にとって明らかだった。ペストの蔓延，当局の無策，都市民の飢餓，人々の絶望，救いのための祈りと教会の裏切りという人々の想い，それらすべてであった。そして，警察権力と軍事力が十分な効力を発揮しないことも露呈した。それゆえ，エロープキンは，エカチェリーナ二世への報告で，自分のとった手段が不十分であったこと，状況が危険であったこと，以上を報告したのである。9 月 19 日に彼は書いている。「おそらく，すべては落ち着きました。しかし，これに希望を抱くことはできません。酔っぱらった民衆，ラスコーリニキ，書記たち，主人のもとにいるホロープ〔奴隷，すでにピョートル時代には消滅していたが，言葉として残っていた。ここでは家内奴僕を指す〕がいるのです。みな村へとあちこち行ってしまっています。人々は，その怠惰な生活によって居酒屋に絶え間なく入り浸っているのです。私はチュードフ修道院が憐れむべき状況なのを見ました。すべての窓は割られ，羽根布団は裂かれ，外はその柔毛で溢れています。イコンは打ち壊されています。暴徒たちは人々を脅しました。医者に対してはなおさらです。多くの人たちに対して暴行を働き，また，私，第一にピョートル・ドミートリエヴィチ・エロープキンを含めて，殺すぞと脅すのです。しかし，重要な点は検疫所です。群衆はこの名称に我慢ならないのです。元老院には誰も行きません。〔行ったのは〕ただわれわれ二人だけなのです。ヴォロンツォーフ伯は書いています。彼の村では，人々が感染しました。そのために，彼は他のさらに遠い所へ行ったのである。コズロフスキー公は暇をもらいました。病を得てエロープキン〔当時の習慣に従って，自らの氏名あるいは 3 人称で書いている〕は発病して寝床に伏せています。〔参議会の〕総裁の方々は，誰にも許可を求めません。なぜなら，そのメンバーと検察官たちは〔すでに，自分の領地のある〕村に出かけてしまっているからです。誰にも命令しません。誰にも人を派遣しません。答えるのは村なのです。誰一人手助けしてくれる人もいないので，私一人では何もできません。軍隊は少数なのです。この都市は大きいのです。悪のための卑劣な行為がたくさん行われています。捕まえられた悪人たちの間には，書記がたくさんいます。すべて参議会の人です。そしてその兵士たちが。クレムリンの衛兵勤務をしている近衛隊の退職した大隊の老人たちは，すべての人たちよりも暴動を起こして盗みを働きました。建築家のバジェノーフはその目撃者です。彼はその設計図の家からすべてを見ていて，多くの話を聞いていました。いまでは次のような報せが届いています。パフルにあらゆる人がたくさん集まり，ありとあらゆる武器をもってモスクワに行こうとしています。ここから村で盗賊行為を働いた者たちは酔っぱらって，す

べてを破壊すると脅しています。私一人がこの都市にいて，この元老院に残っているのです。手助けしてくれる人は誰もいませんい。軍隊は残っていません。伝染性の病気に囲まれています。どこよりもこの病気に常に晒されています。私のところにやってくる人々は皆行かせねばなりません。いかなる必要なものも私には役に立ちません。一人市警察長官だけが至る所を走り回っています。すべを見て，寝る暇さえありません。私は陛下に詳しく報告することができません。さまざまなあらゆることを見たり聞いたりしています。そのような民衆をあらゆる厳格さを除いて，秩序に導くことはできないのです」(39)。

9月21日，サルティコーフは書く。「指導者なしにすますことはできません。なぜなら，モスクワだけではなく，郡でも，若干の健康な人に兵士の制服を着せて，御料地や経済領〔詳しくは後述〕の相続領地を巡り，県官房から送られてくる命令を知らせるのです。そして民衆を前にして司祭たちに読むことを命じさせるのです。長老や選出された人々に署名させるのです。モスクワで警鐘あるいは大砲の空砲が聞こえたらすぐにモスクワに棍棒と猟槍をもって駆けてくるようにと。私は〔すなわちモスクワの〕ヴェリコルツキー連隊に留まっていました。赤の広場の重要な部署です。大砲をもって，必要な場所には哨兵がいました。もし部隊が十分なら，とくに斥候や守備のため騎兵隊が十分いるなら，その害悪はすぐに一掃されるでしょう。教導師はラスコーリニクから出さねばなりません。なぜなら，彼らはいつも検疫所に反対しているからです。そして次のことは注目に値します。主教の教会はすべて破壊されました。教会の礼拝用具は割られ退けられました」。第一に不足しているのは軍事力なので，市会筆頭のプロタソーフの提言に従って，商人たちから見張り役が設けられた。しかし，まもなく，見張り役は必要なくなった。モスクワにГ.Г. オルローフが全権を委ねられて軍隊を率いてやってきたからである(40)。

以上が，ソロヴィヨーフが史料を用いて，モスクワでペストが蔓延し，暴動が発生した当時の様子について記述した内容である。これをさらに別の角度から確認してみよう。

第2章　「日常」と「非日常」に生きる人々

第1節　モスクワに派遣された将校の手紙

ペテルブルクからモスクワに，プレオブラジェーンスキー近衛連隊所属の将校アレクサンドル・サブルコーフが派遣された。彼は父親に手紙を書き送っており，それがモスクワでの事件について緊迫感を伝える史料にもなっている。ここではモスクワで過ごした日々の日記風の彼自身の抜き書きを掲げておこう(41)。その意味では「非日常」の中で「日常」の生活を示した史料となっている。

1771年8月22日，誰もお金に関心が向かない。なぜならほとんどすべてのご主人（господин）

〔すなわち貴族〕がたは田舎に行ってしまったからである。

8 月 25 日，病気は本当にペストなのだ。そのため，すべてのご主人がたは〔モスクワから〕出て行ってしまった。庶民のみが残っている。その中にはこの病気に罹った人もいる。ペストは終息せずに拡大している。指示に従って，私は病気に罹患している人，死んだ人を見なければならない。この病気ははなはだ伝染性の高い病気である。

8 月 29 日，私の部隊は 1000 戸を受け持っており，毎日 300 人に関する事案がある。警察官との衝突が発生している。

8 月 30 日，疫病は甚だ拡大し，誰も撲滅できない。医者は厳寒が訪れる前に〔この病気から〕救われることはできないと確信している。

9 月 1 日，人々は刻一刻と亡くなっている。職人，パン焼き人，ピローグを作って販売する人，あらゆる人々である。どのような人も村へと散り始めている。私の管轄する地区（20 ある地区のうちの一つ）から，この 6 日間に〔罹患した人が〕700 人ほど出てしまった。出かける前には，医者が彼らを検診して健康であることを示す証明書を渡すのである。

9 月 5 日，裁判所がすべて閉鎖した。

9 月 8 日，私の管轄する地区の人々はとても減少している。すべての人〔貴族たち〕が村々に行ってしまった。家には 3 人を上回らない人しか残っていないところもある。主人がたの家には，たった 1 人の屋敷番しか残っていないのだ。

9 月 12 日，モスクワに残っている将校と他の者たちは健康だ。

9 月 13 日，エロープキンはプレチステンスキー門のある第 14 地区に住んでいる。

9 月 15 日，エロープキンは，これ以上望むことのできないような素晴らしい指揮官だ。首を長くして冬を待とう。冬がペストにとって良い薬となるに違いない。

9 月 22 日，以前のような静けさが支配している。天気は寒くなってきた。望むらくは，神がペストを鎮めることだ。騒乱の時に拘束された人々に対する裁判が行われている。

9 月 26 日，われわれすべてと同様に，わが部隊も，発生した暴動から彼らを救ったことに対して，全市民から筆紙に尽くしがたいほどの感謝を受けた。

9 月 27 日，夜，わがモスクワにグリゴーリー・グリゴーリエヴィチ・オルローフが到着した。そして，彼がペスト委員会における秩序構築に至るまでのすべての問題に対する全権とするマニフェストが発布された。われわれは彼の到来を喜んだ。彼は，9 月 16 日に起きたわれわれの戦いを非常に称賛した。マニフェストには，この委員会が適当な秩序をもたらす時，その功績は彼に帰すべきことが記されていた。

9 月 29 日，モスクワに静けさと平和が戻った。

10 月 3 日，ペテルブルクから来た人が多い。これらの人すべてはいわばさまざまな委託を受けている。死んだ人や病気に罹った人は，報告書で見るように，神のご加護により甚だ少な

かった。

10 月 6 日，Г.Г. オルローフ伯は，人々を感染症の拡大から守るために，さらに有益な法令を作るべく絶え間なく配慮している。

「あなた様〔父〕は 9 月 19 日付の私の手紙を受け取っていないとお書きですが，騒乱時に生じたすべてのことを私は書きました。手紙が郵便局で差し止められている，とは考えてはおりません。というのもこれは秘密ではありませんし，どこか知らない土地で書いたわけでもありませんので。もし騒乱時に近衛連隊の将校が居合わせなかったら，いったいだれがこの騒乱を鎮めたでしょうか」。

10 月 11 日，ご主人がたがモスクワに集まり始めた。

10 月 24 日，モスクワの状況は随分と改善された。すなわち，死者数は以前の 3 分の 1 にまで抑えられている。

10 月 27 日，神のご加護によってペストが収まってきた。

11 月 3 日，死者が減ってきているように感じられる。

11 月 7 日，神のご加護によりペストは終息してきた。モスクワは凍える寒さだ。

11 月 14 日，本日，ここでミハイール・ニキートゥィチ・ヴォルコーンスキー公を迎える。彼はここでの頭となるだろう。〔サルティコーフ〕侯は今週ペテルブルクに行くという話だ。大変残念ながら，П.Д. エロープキンは退職する。

1772 年 1 月 5 日，私の受け持ちの地区では，6 週間，神のご加護によって無事だ。

以上から，外に領地を持つペスト感染を恐れる貴族たちがモスクワを離れていった様子が分かる。この将校が果たしたペストに関する任務の重さ，それを果たしていく喜びが表されている。またエロープキンに対する絶対的な信頼，オルローフに対する尊敬が隠さず表明されている。10 月 6 日の項目に書かれているモスクワ暴動についての記述は見つかっていない。当局の検閲にかかったのかもしれないが，詳細は不明である。なお，手紙には次のような 1771 ～ 72 年のモスクワの商品価格についてのメモも付いており，当時の物価を知る上でも貴重である[(42)]。

表 1　価格一覧

4 輪馬車の車輪 2 つ	2 ルーブリ 70 カペイカ
蝋燭 1 プード（16.38 キログラム）	2 ルーブリ 40 カペイカ
衛兵の見張り小屋	4 ルーブリ
封蝋 1 フント（409.5 グラム）	1 ルーブリ 45 カペイカ
仕事用の馬	14 ルーブリと 15 ルーブリ
軽騎兵用の馬	14 ルーブリ
4 輪馬車	1 ルーブリ 20 カペイカ
そり	95 カペイカ
馬一頭の装蹄	1 ルーブリ 4 カペイカ
首輪	75 カペイカ
一桶分の酢	17, 20, 35, および 45 カペイカ
荷車 1 台分のねずの実（注）	40 カペイカ
棺桶	78 カペイカ
墓	35, 40 カペイカ
紙一連（480 枚）	1 ルーブリ
シューバ（毛皮外套）と カフタン（袖長上着）	5 ルーブリ 26 カペイカ
記録係がひと月受け取るお金	10 ルーブリ

（注―著者）「ねずの実」は消毒に使われたのであろう。

また，一日の食糧手当の表もあるので参考のために付けておこう。

表 2　一日の食糧手当

近衛連隊の軍曹および伍長	10 カペイカ
工員（Фабричный）	6 カペイカ
懲役囚（注）	6 カペイカ
近衛連隊の兵士	5 カペイカ
屯田兵（Поселенный）	5 カペイカ（10 カペイカ）
書記（подъячий）	4 カペイカ（10 カペイカ）
埋葬人	4 カペイカ（5 カペイカ）
ヴェリコレツキー連隊兵士	4 カペイカ
大隊の兵士	3 カペイカ

（注―著者）本文中でも記したように，この時代の懲役囚はペストで死んだ人を埋葬する仕事に従事した。

以上の表について，従来の研究では論じられることはなかった。しかし，他の時代のモスクワの物価との比較，あるいは同時代の別の地域の物価との比較をしてみると，都市民の生活の状況を知ることができる。ちなみに，1720 年代から 70 年代までの南ウラルのヤイークにおける商品価格の一覧の中に馬の価格がある。並種の馬一頭で 7 ～ 10 ルーブリ，純血種で 50 ルーブリである。穀物 1 チェトヴェリーク（8 分の 1 チェートヴェルチ，26・24 リットル）あたり 2 ルーブリ 30 カペイカ，ひきわりあるいは脱穀した穀物 1 チェトヴェリークあたり 2 ルーブリ 90 カペイカ，カラスムギ 1 チェートヴェルチ（約 210 リットル）あたり 1 ルーブリ 65 カペイカである。そして，羊の毛皮のシューバは 3 ルーブリ，粗いラシャ製のカフタンは 1 ルーブリ 20 ～ 50 カペイカである[43]。以上のようなことから，大都市での価格は地方に比べて高く，

生活のためには相当な支出を要したであろうことが想像される。

第 2 節　貴族の手記

アンドレーイ・ボロートフも，自分の領地トゥレイノにいながら，1771 年 8 月以降のモスクワでのペスト感染拡大に不安を抱き，またその被害に心を痛めながら綴っている。いわば人々の日常の生活の記録である。

ペスト蔓延に対する恐怖

ボロートフはモスクワでのペストの感染拡大に恐怖心を抱く。「私たちは全員この場所におり，その悪霊（дух）の広がりに苦しんでいた。その広がりを筆で表現するのは難しい」(44)。さらに，次のように言うのである。「時折，私たちのところまでモスクワで拡大している伝染病についての噂が伝わってきた。しかし…もしその災厄がわれわれのもとに近づいてきたなら，どこか遠くに逃れることができる，と私たちは考えたし，一度ならずそう言ってきた。たとえば，もし近隣の村からどこかに行くことができないのなら，ステップ地方のコズロフスキーかシャツキーに行こう。…このようにして，〔1771 年〕8 月の後半全部を，自分で自分を励まし慰めようとしてきた。その間，モスクワに関する噂は刻一刻とますます恐ろしいものとなっていた。しかし，わたしたちの近所だけではなく，セルプホーフにまでこの災厄は至っていなかった。とはいえ，いずれにせよわれわれは以前の平穏な精神のなかにいるし，いつも通り外出やお互い同士の対面を続けていた」(45)。

「しかし，9 月になったかと思うと，突然ある日の朝，驚いたことに，疫病がわがトゥレイノにまで浸透してきたという報に接して，筆紙に尽くしがたい恐怖に襲われた。私が聞かされたのは，われわれのところからたった 4 ヴェルスタほどしか離れていない村で，ゴルチャコーフ公のもとにいる一人の百姓が急死し，モスクワからやって来たもう一人の百姓は病気に罹って死にかけているということだった」(46)。

「神よ！私がこのことを聞いた時，どれほど震え上がったことか。また，私たちに危険がどれほど近づいているかという報せを聞いた時，私たちはそれについてどれほど驚いたことか。とくに，毎日われわれが必要な情報を得，そこから私たちのもとへ，また毎日私たちのもとからそこへ日夜人々が行き来していた村でペストが発生したことを聞いた時には。当時，私たちのトゥレイノはほんの数日で住民全員が一人残らず死に絶えてしまう。いずれにせよ，問題が私たちのところまで来ていることに注視する，ということを考える以外になかった。私たちはこのような災厄に遭遇しているのだ。私たちは以上のことを考えたのだった」(47)。

庭作りの興味を喪失

啓蒙時代のロシアでは造園が流行した。同じく庭作りに精を出していたボロートフは，ペスト蔓延に接してそのことへの興味を失っていく。

「私の庭そのものが，私の目にはそのすべての魅力を失い，以前通りにそれが私を慰めてはくれなくなった。私のやり方は，庭でふたたび秋の仕事を行うことだったし，くぼんで段をなしている個所などで，下流の私の庭に手を加え続けることだったのだが」(48)。

「ああ！私は本当にこの仕事〔庭つくり〕を続けるのだろうか？誰にとって，また何のために，そのようなことすべてをするのだろうか。そしてそんなにも熱心に働くのだろうか？幾週間後には―しかし私は言うのだが！―おそらく，否たった幾日かののち，私のすべての村を荒廃させてしまうだろう。この呪わしいペストが。私たちのところに入り込んで，ここのすべての住民を子供から大人に至るまですべての人を殺してしまうのだ。そしていまここで生活している人は誰もいなくなるのだ。ではその時，庭だけではなく，すべての村，そしてこの家はどうなるというのか？…おそらく，何年も経つと，これらの不幸で危険な場所に住みたいという人は誰もいなくなるだろう。…誰がこれらすべてを手に入れるというのか。誰がこの場所を所有するというのか。ただ神だけが御存じなのだ」(49)。

周囲への目

隣村でのエピソードが，ボロートフを感傷的な独白へと誘う。「百姓は必ずしもペストで死んだわけではなかった。噂の半分は偽りのようである」(50)。そして，彼は次のように続ける。「私たちは，いわば精神を落ち着かせ，幾分か安心するとすぐ，まさにその日に，あれこれと恐ろしい報せに驚かされた。私が聞いたのは，ペストがすでにニージニー・ゴロドニャに達し，百姓一人と老女二人が，苦しみもなく，痛みもなく，ペストで死んだということだ」(51)。

ボロートフ一家がある隣人のところにお客に行った時の話しである。「何てことだ！まさにその時〔お客に行ったとき〕，夢中になってモスクワから逃げ去り，モスクワから，ペストに感染した彼の妻の母の家から，直接彼のところへやって来た人に居合わせたのだ。私たちはそれに大変驚愕して…できるだけ早くそこから退散しようとした。…しかし，私が驚いたその時，こんなことがあった次の日に，私は自分の妻の母が，突然足が痛くなり，赤くなって炎症を起こし，ひどいインフルエンザに罹ったと訴え始めた」(52)。

届く報せは悪くなる一方であった。9 月 27 日，若い司祭のエウグラフから聞いた話として伝えている。「自分の同僚である死去した司祭イヴァンについて次のような報せがあった。ズロービン〔村〕に，ペストから逃れてモスクワからやって来たゴルチャコーフ公の姪が，とても早くしかも不審にも病気に罹って死んだ。彼が上で述べた同僚は，彼女に聖餐を授与しただけではなく，教会のそばに密かに埋葬した。彼女はおそらくペストで死んだのだ」(53)。

「われわれはまったく恐怖と絶望の中にいた。なぜなら，上で述べた村以外にも，別の場所もペストに見舞われていたからである。…ズロービンのことについて知られているのは，死んだ公の姪以外に，彼女の〔葬儀の〕ために歩いた女性たち全員，および他の人たちも死んだということだ。そして，この村の住人はペストに感染した人全員を，村から遠く離れた製粉所のそばにある農民小屋に追い立てた。そこで，彼ら全員を殺すために閉じ込めたのだ。老人で，私たちのろくでなしの司祭が，教会のそばにそこで死んだ人たちを埋葬した」(54)。

以上のように，ボロートフの手記は，ペスト発生時の個人の感情を吐露している貴重な史料となっている。また周囲の変化についても，自らの目を通して語られていて興味深い。しかし，モスクワ暴動の記述はない。彼にとって，それはあたかも遠い世界の出来事であったのかもしれない。

第3章　「非日常」の犠牲

上のような史料を前にして，次のような疑問が浮かぶ。ペストの急速で広範囲な広がりの原因はどこにあったのか。暴動はどのようにして生じたのか。なぜ民衆は検疫所を破壊したのか。ペストの死者や病人はいかほどいたのか。ペストが終息した後のモスクワにはどのような変化があったのか，などである。

ペストの広がりと死者数についての疑問

ソロヴィヨーフによると，原因はサルティコーフとモスクワ住民にあるとする。すでに述べたように，サルティコーフは検疫所の必要性を否定し，エロープキンの政策を批判していた。これに対してモルドフツェフは衛生観念の欠如がそれをもたらしたとしている(55)。また旧ソ連の歴史家Π．アレフィレーンコは，この時代のモスクワ住民は困難を感じていた。それは当時の封建制システムによってもたらされたとしている。領主たちはモスクワを離れ，自らの所領に赴いたが，家内奴僕をモスクワに食糧もなく，また医療の助けもなく残した。そのことは人々の生活を警察の専横に任せることにも繋がったとしている(56)。

ペストによる死者数については研究者によって隔たりがある。サルティコーフに近いシャフォンスキーの計算によれば，少なくとも1年で5万3千人のモスクワ住民が死去した(57)。エカチェリーナ二世自身はグリムへの手紙で10万以上と述べている(58)。帝政時代の歴史家Ａ．Γ．ブリークネルによると，1771年だけで5万6672人が死去したという(59)。旧ソ連の歴史家Π．アレフィレーンコは，元老院のアルヒーフ史料として保存されている当時の医者サモイロヴィチの試算に基づいて，モスクワ郊外だけで7万5398人が亡くなったと算出した。かくして，モスクワとモスクワ県では，1年で約20万人が死んだというのである(60)。しかし，明確な数字は残されていない。

暴動の首謀者と参加者についての疑問

暴動では，千人以上の人々が死亡した。鎮圧後，300 人が裁判にかけられ，そのうち 173 人が鞭打ち懲役刑の判決が下ったのである。1771 年 11 月 11 日，モスクワで 4 人が公開で処刑されている。アムヴローシー殺害の首謀者としてドンスコイ修道院の壁の下では，モスクワの商人イヴァン・ドミートリエフ（Иван Дмитриев）と家内奴僕ヴァシーリー・アンドレーエフ（Василий Андреев）が，モスクワの住民を唆し脅かした廉で赤の広場では，フョードル・デヤーノフ（Федор Деянов）とアレクセーイ・レオーンチエフ（Алексей Леонтиев）が処刑された。ネグリンナヤ広場，ツァリーツィン草地，ゼムリャンノイ土塁とベールィー・ゴロドの門では，72 名が鞭（あるいは笞）打ちのうえ，枷をはめられ鎖に繋がれてバルト海に臨む港町ロゲルヴィクへ懲役囚として送られた。89 名は鞭打たれ，国営工場での強制労働に送られた。12 名の未成年者も笞打たれた。エカチェリーナ二世の命令により，クレムリンの塔も「処罰された」。将来，この暴動のときのように，人々が集まることがないようにスパッスカヤ塔にある鐘楼の鐘の舌（ぜつ）が取り外されたのである[61]。

モスクワ民衆への蜂起参加についての呼びかけはどのようになされたのだろうか。アレフィレーンコはアルヒーフ史料を用いて分析する。暴動鎮圧後の尋問で，家内奴僕のミヘーエフは「通達」（повестка）についての噂を記憶している。「もし，騒乱が起これば，〔その場所に〕走っていくことになっていた。2 週間ほど前，彼を衛兵のもとに連れてくる前に，ミヘーエフは人々のそのような話を聞いていたのである」。それについて，「暴動の前に」，モスクワの商人ヴァシーリー・グリゴーリエフが耳にしたことは，「警鐘が鳴らされ，大砲が放たれると，あなた方は武器をもってクレムリンの大聖堂に走ってくること，と見知らぬ人々から聞いた」[62]，という。しかし，結局のところ，暴動に関する調査委員会は，その首謀者を特定することはできなかった。このようにしてみると，暴動は自然発生的に起きたと言えるのである[63]。

また，暴動に参加した「民衆の中には，大貴族の家人，商人，書記，工員がいた」[64]。尋問史料から，第一に多い参加者は家内奴僕であることがわかる。次いで，御料地農民，経済領農民（エカチェリーナ二世の還俗政策により聖界領が経済参議会に編入されるに従い，聖界領農民もこの部局が管轄することになったためにこのように呼ばれる）である。彼らはモスクワでさまざまな手工業に携わっていた。さらに，マニュファクチャー労働者である。暴動に加わった人の中には第 3 ギルドに属する商人，モスクワ連隊の兵士，下級聖職者，官房の写字係，女性さえもいた。一人だけ貴族（少尉）が参加していた。

暴動初日の逮捕者は 297 名，そのうち 148 名は家内奴僕，58 名が農民，12 名がマニュファクチャー労働者，10 名が手工業者，20 名が兵士，23 名が商人，10 名が官房勤務者（канцелярские служащие），9 名が勤務者（служилые люди），そして 7 名が聖職者である。さらにどのような刑罰がどのような人に与えられたかが分かっている。体刑を受けた 161 名中 78 名が家内奴僕，

35 名が農民，6 名が工場の労働者，3 名が手工業者，8 名が兵士，15 名が商人，7 名が聖職者，6 名が官房勤務者，1 名が勤務者，そして 1 名が少尉であった[65]。

攻撃対象についての疑問

暴動の最中，群衆はアムヴローシー殺害の後に検疫所を破壊している。「彼らは二つの検疫の家を，その中にいた人々を追い散らして破壊した。そのうちの一つはダニーロフ修道院であり，いま一つはセルプホーフ門の外側にあった家である。その際，病人を病院に収容したこと，および健康な人を検疫所に入れたことに対して，陸軍中将で副連隊長のマヌイーロフ公，医師ヤゲリスキーおよび感染症委員会にいる全員を殺すぞと脅しをかけながらそうしたのであった」[66]。さらに蜂起者の多くはモスクワ貴族会館に向かった。

アレフィレーンコによると，ロシアの農奴制について芽生えてきた危機が 1770 年代の民衆運動の主要な原因だったとする。こうした運動の最初がペスト暴動だった。この暴動の限界性にもかかわらず，要求の面でも，またその領域の面でも，運動はそれ自体反封建的闘争の基本的性格を有していた。叛乱の自然発生的な大衆運動の特徴と頑強さは，この運動の根底に根深い社会的原因があることを示しているというのである[67]。旧ソ連時代の闘争史観に基づく発想ではあるものの，運動の根本原因を考えようとすることは重要である。ペテルブルクと並ぶ両首都の一つとして，モスクワは重要な都市であり，ここで発生したペストとそれに起因する暴動は，その特殊性を考慮しても，政府が見過ごすことができなかった。ここで疫病が発生・拡大したが，政府にはそのことによる世情の不安定要因を取り払う必要があったのである。地方ならこれほどまでに迅速な政策はとられなかったであろう。

おわりに

以上，モスクワのペスト蔓延と暴動に関する史料を紹介した。それらからは，一連の出来事に対する中央政府とモスクワ当局の対応の遅れと杜撰さが明らかとなる。後のプガチョーフ叛乱における中央政府と地方当局の対応のそれを髣髴とさせるものがある。

また，さまざまな史料からは，非日常の中に日常があることがわかる。ペストの猖獗という異常な事態の中にあって，生活を営む人々の様子が浮かび上がる。史料を残すことがほとんどなかった民衆の声を拾い上げることは難しい作業ではあるが，こうした非日常の中でこそ，その一端が浮かび上がってくる。本来であれば，教会で祈りを捧げ，イコンに接吻し，献金箱に喜捨する人々は，病気が蔓延する際には，門に掛かっているイコンに跪き燈明を上げるためにお布施箱に喜捨していた。それ以外に民衆にとっては希望を表現できる方法がなかったのである。

ペストの蔓延とそれによって引き起こされた暴動は，ロシアの歴史に何をもたらしたのであ

ろうか。この暴動鎮圧の後，エカチェリーナ二世は寵臣グリゴーリー・オルローフ（Г. Г. Орлов 1734 ～ 83 年）をモスクワに派遣した。彼にはこの都市の状況を解決するために総督としての緊急非常全権が委ねられた。彼は感染を抑えるための合理的な対策をとった。検疫体制の強化，隔離された感染症病院の創設，そして医者への俸給の増額である。都市から不潔物やごみを取り除くため住宅や作業での消毒を系統立てて行うようになった。通りに生息する病気を媒介すると見なされた動物も一掃された。都市への出入りが厳格化された。略奪兵や強奪者に対してはその犯罪が行われたところで処刑されることになった。しかし，こうした政策は地方には及びはしなかったのである。プガチョーフ叛乱まであと 2 年と迫っていた。

（補遺）本文では旧ロシア暦（ユリウス暦）を使用している。18 世紀においては，11 日を加えると現在の西暦（グレゴリウス暦）になる。

注

（1） 村上陽一郎『ペスト大流行―ヨーロッパ中世の崩壊』岩波新書，1983 年。山本太郎『感染症と文明―共生への道』岩波新書，2011 年。岡田晴恵『感染症が世界史を動かす』ちくま新書，2006 年。W.H. マクニール（佐々木昭夫訳）『疾病と世界史』（上・下）中公文庫，2007 年（原著は 1976 年刊行）。

（2） Соловьев С.М. *Москва 1770-1771 г.* // Русская старина, октябрь 1876, с. 189-204.

（3） Брикнер А.Г. О *чуме в москве 1771 г.* // Русский Вестник, сентябрь 1884, с. 5-48; октябрь, с. 502-568.

（4） Алефиленко П. *Чумый бунт в Москве в 1771 году* // Вопросы истории, 1947, №. 4, с. 82-88.

（5） Чеботарев А.М. *Информационно-рекламная деятельность правительства по пресечению «приличивой болезни» 1770-1775 гг.*, Челябинск, 2016.

（6） Alexander J.T., *Bubonic Plague in Early Modern Russia. Public Health & Urban Disaster*, Baltimore and London: The Jones Hopkins University Press. 1980, pp. 101-254.

（7） Горелова Л. Е. *Чума в Москве (1770-73 гг.)* // Русский медичинский журнал, №. 16, 2002, с. 738; Сметанин Д.В. *Чума и Российская империя. Борьба с эпидемиями в XVIII-первой трети XIX века.* СПб., 2020, с. 53-101.

（8） たとえば次のようなものがある。Alexander M. Martin, *Enlightened Metropolis: Constructing Imperial Moscow, 1762-1855*, Oxford University Press, 2013, pp. 14-15.

（9） *Письма А.А. Саблукова своему отцу* 1771 *г.* // Русский архив, 1866 г., с. 330-339.

（10） *Описание московского бунта 1771 г. Составленное протоиереем Петром Алексеевым* // Русский архив, Год первый, 1863, с. 910-916.

（11） Болотов А. Т. *Записки Андрея Тимофеевича Болотова. 1773-1795.* СПб., 1873, т. III, ч. XV, с. 5-15, 17-19, 31, 34-41.

（12） Alexander J.T., *op. cit.*, pp. 101-115.

（13） *ibid.*, pp. 143-144, 185.

（14） Charles de Mertens, *An Account of the Plague which Raged at Moscow, 1771*, London. 1799 (Newtonvilles, Mass.: Oriental Research Partners. 1977), pp. 27, 33-34; Брикнер А.Г. *Указ. стат.* с. 42.

（15） Болотов А.Т. *Указ соч.* с.18.

（16） *Сборник императорского руссокого исторического общества*, т. XIX, СПб., 1876, с. 243 (St. Petersburg, November 18 (29), 1771).

（17） Соловьев С.М. *Указ. стат.* с. 190.

(18)　Там же, с. 191.
(19)　Там же, с. 191-192.
(20)　Там же, с. 192.
(21)　Там же, с. 192-193.
(22)　Там же, с. 193.
(23)　Там же, с. 193-194.
(24)　Там же, с. 194.
(25)　Там же, с. 194-195.
(26)　Там же, с. 195-196.
(27)　Там же, с. 196.
(28)　Там же, с. 196-197.
(29)　Там же, с. 197-198.
(30)　Там же, с. 199-200. これには，エカチェリーナ二世による聖界領の還俗化が聖職者たちの経済的貧困化を助長したという背景がある。
(31)　ソロヴィヨーフは次のような注を付けている。暴動についてのメモで，その不詳の作者は（事件への添付で）次のように述べた。「群衆対応に任じられた番兵たちは金銭を盗むことを許さなかった（しかし，市警察長官は，番兵はモスクワ守備隊から成っていると断言している。）書記は殴られ，番兵のところに引き出された。司令官と共に喧嘩が始まったのである」。メモの作成者は教育のある人である。かくして，モスクワの元老院たちのモスクワからの退去について述べながら，次のような表現を使っている。「徴集された父たち（patres conscripti 古代ローマの元老院たちを指す）自身が，〔自分の領地である〕村に退去していった」。喜捨に関するアムヴローシーの処置について，メモの作者は次のように言う。「実際，この際のやや荒っぽい至聖なる人物は，不注意な行動をしたのである」（Там же, с. 200（примечание））。
(32)　Там же, с. 200-201.
(33)　Там же, с. 201.
(34)　Там же, с. 201-202.
(35)　Там же, с. 202.
(36)　ソロヴィヨーフの次のような注がある。このヴェリコルツキー連隊はモスクワ管区を統括する主要な軍事力である。しかし，全連隊は 350 人からなり，そのうち 300 名は安全のためペストを避けるべく，モスクワから 30 ヴェルスタ離れたところにいた。したがって，50 名だけがエロープキンの指揮下でモスクワにいた（Там же, с. 202）。
(37)　Там же, с. 202-203.
(38)　Там же, с. 203.
(39)　Там же, с. 203-204.
(40)　Там же, с. 204.
(41)　*Письма А.А. Саблукова своему отцу 1771 г.* с. 336-338.
(42)　Там же, с. 338-339.
(43)　Рознер И.Г. *Яик перед бурей*, М., 1966, с. 84.
(44)　Болотов А. Т. *Указ. соч.* с. 5.
(45)　Там же, с. 8.
(46)　Там же.
(47)　Там же, с. 9.
(48)　Там же.
(49)　Там же, с. 10.
(50)　Там же, с. 11.
(51)　Там же, с. 12.

(52) Там же, с. 13.

(53) Там же, с. 34.

(54) Там же, с. 40.

(55) Мордовцев Д. *Чума в Москве 1771 г.* / Древняя и новая Россия, т. II, с. 14, 1875（Алефиленко П. *Указ. стат.* с. 82-83 より転引用）.

(56) Там же, с. 83.

(57) *Описание морвой язывы, бывшей в столичном городе Москве с 1770 по 1772 г.*（изд. 1-е, М., 1775）, с. 83, 123（Алефиленко П. *Указ. стат*, с. 87 頁より転引用）.

(58) *Письмо Екатерины к Гримму от 30 января 1775 г. из Москвы* // Русский архив, 1878 г., кн.3, с. 14（Алефиленко П. *Указ. стат*. с. 87 頁より転引用）.

(59) Брикнер А.Г. *Указ. стат*. с. 548.

(60) Алефиленко П. *Указ. стат*. с. 87.

(61) *Полное собрание законов Российской империи. Серия первое*, 1830, т. XIX, №. 13695, с. 364-371.

(62) Алефиленко П. *Указ. стат*. с. 84.

(63) Там же.

(64) Там же, с. 85.

(65) Там же, с. 87-88.

(66) Алефиленко П. *Указ. стат*. с. 85.

(67) Там же, с. 88.